

Title	書評 近代京都研究
Author(s)	中嶋, 節子
Citation	人文學報 = The Zinbun Gakuh : Journal of Humanities (2009), 98: 327-333
Issue Date	2009-12-30
URL	https://doi.org/10.14989/134778
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

[書 評]

近代京都研究

(丸山宏 伊従勉 高木博志編 2008年8月 思文閣出版 A5判600頁)

中 嶋 節 子

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

編者らによる近代京都をフィールドとする研究は、1998年6月に立ち上げられた「近代京都研究会」にはじまる。2003年からは京都大学人文科学研究所「近代京都研究」班(班長:丸山宏)として2005年まで継続され、本書はその成果報告として上梓された。8年におよぶ共同研究は、歴史学を中心に建築史、造園史、美術史、観光学などさまざまな専門分野の研究者が集い、「近代京都をめぐる、様々な事象を俎上に載せ、研究目的を固定化しない自由闊達な研究会(4頁)」を行うというものであった。月に一度のペースで開催された研究会の内容は、巻末の「近代京都研究会・開催一覧」に記される。多彩な論者によって提示された論題からは、研究会を通して近代京都の多面性が受容され、理解が深化していく過程を読み取ることができる。

こうした研究会の性格は、異なる視座からのアプローチをとりつつも、近代の京都をいかに捉え、相対化するかといった問題意識を共有する本書の20篇の論考にも示される。近代京都をめぐる研究は、各分野において主題別・目的別には進められてきたが、こうした学際的・包括的な地平に立った議論はほとんどなされておらず、その点において本書は画期的な意義を有すると言ってよい。

なお、本書に先立ち、2008年3月に『みや

この近代』(思文閣出版)が、同編者により出版されている。「近代京都研究会」で論じられた主題をもとに、2年間にわたり『京都新聞』に連載された85篇が収録される。一般読者向けに書き下ろされた内容ではあるが、研究会に参加した39人の筆者による論考群は、分野にとらわれず近代の京都を多角的に捉えようとする「近代京都研究会」のひとつの到達点を示すものとして付記しておきたい。

以下にまず目次を掲げ、本書の構成と概要を紹介する。次いでその中から検討すべき主題を抽出して論じることとしたい。内容が多岐にわたり、全体を疎密なく評することは評者の能力を超える。評者の専門である建築史・都市史の視点からの論述となることをあらかじめ断っておきたい。

目次

はじめに	丸山 宏
I 都市	
都市改造の自治喪失の起源 —— 一九一九年京都市区改正設計騒動の顛末 ——	伊従 勉
都市計画事業として実施された土地区画整理	中川 理
地価分布からみた近代京都の地域構造	山田 誠
丹後加悦の縮緬産業と近代の町並み	日向 進

II 風景

- 近代京都と桜の名所 高木博志
 近代における京都の史蹟名勝保存 —— 史蹟名
 勝天然記念物保存法をめぐる京都の対応 ——
 丸山 宏
 「昔の東京」という京都イメージ
 —— 谷崎潤一郎の京都へのまなざし ——
 藤原 学
 御大典記念事業にみる観光振興主体の変遷
 工藤泰子
 近代絵馬群へのまなざし
 —— 洛外村社と民俗・近代京都 ——
 長志珠絵

III 文化

- 凋落と復興 —— 近代能の場面 —— 小野芳朗
 京都の初期博覧会における「古美術」
 並木誠士
 近代の茶の湯復興における茶室の安土桃山イ
 メージ 桐浴邦夫

IV 政治

- 北垣府政期の東本願寺 —— 本山・政府要人・
 三井銀行の関係を中心に —— 谷川 穰
 京都府会と都市名望家
 —— 『京都府会志』を中心に —— 原田敬一
 旧彦根藩土西村捨三における〈京都の祝祭〉、
 そして彦根 鈴木栄樹

V 学知

- 阿形精一と『平安通志』 小林文広
 京都帝大総長及び図書館長批判の顛末
 —— 法科大学草創期における一事件 ——
 廣庭基介
 田中緑紅の土俗学
 —— 『奇習と土俗』と二つの旅行 ——
 黒岩康博
 京大生と「学徒出陣」 西山 伸
 京大國史の「民俗学」時代 —— 西田直二郎、
 その〈文化史学〉の魅力と無力 —— 菊池 暁
 おわりに
 付論Ⅰ 京都市政史研究と近代京都イメージ
 論議 伊從 勉
 付論Ⅱ 古都京都イメージと近代 高木博志

本書に寄せられた論考は、「都市」「風景」「文化」「政治」「学知」の5部に編成され、「おわりに」に収められた編者2名の付論が、それぞれの問題意識から全体を総括する。

第Ⅰ部「都市」では、1920年代前後の市区改正および都市計画における京都の実態と特異性が、都市計画道路の計画決定過程（伊從論文）、都市計画法による土地区画整理事業（中川論文）を通じて詳細にトレースされる。地価の動向と地域特性の分析（山田論文）は、こうした都市改造・都市計画事業の結果を含め、近代京都の空間ヒエラルキーの変化を把握する指標を提示する。また、近代産業による町並み形成のプロセスが、加悦町加悦地区を事例に紹介される（日向論文）。

第Ⅱ部「風景」では、近代京都の風景を担う装置として、桜の名所（高木論文）と史蹟名勝（丸山論文）が取り上げられ、その創出の過程と保存制度の成立を追うことで、京都イメージ生成の現場が暴露される。また、イメージ論として谷崎潤一郎のまなざしの先に「昔の東京」としての京都を見いだす論考（藤原論文）が加えられる。風景は、民衆の動きとして観光や社寺参詣と深く結びつくが、ここでは、御大典記念事業を通して、観光振興の主体が、行政へと移る過程が指摘（工藤論文）されるとともに、洛外村社に奉納された近代絵馬群を手がかりに、郊外電車の開通によって広域化した洛外の参詣や、洛中に対する洛外の「民俗」表象（長論文）が語られる。

第Ⅲ部「文化」は、「伝統」再編の物語である。各論考では、能（小野論文）、古美術（並木論文）、茶の湯（桐浴論文）、それぞれの近代における再評価と復興の過程、性格が掘り下げられる。前近代の「伝統」を、近代的価値観によってオーソライズすることで、新たな継承システムを構築しようとする契機と意味の把握は、京都のローカリティとしての「伝統」のグローバル化の問題に肉薄する。

第Ⅳ部「政治」では、宗教、都市名望家、都市イベントの担い手について論じられる。

本願寺の財務問題が、近代京都の政治問題として解決されるべき対象であった事実の指摘（谷川論文）は、宗教都市・京都の再認識を促す。都市史への歴史学からのアプローチにおいて注視されてきた都市名望家をめぐって、ここでは『京都府会志』を中心に分析し、府会第Ⅰ期府県会規則時代（一八七九～一八九八年）の名望家の性格を「逃げる名望家」と指摘する（原田論文）。また、第四回内国勸業博覧会、平安遷都千百年記念祭の開催を推進した西村捨三の動向を追うことで、〈京都の祝祭〉が府県連合をはじめ広域的な枠組みのなかで画策されたことが確認される（鈴木論文）。

第Ⅴ部「学知」では、在野の研究者と京都帝国大学の動向を通じて、近代京都の「学問の府」としての側面にスポットが当てられる。公共機関・組織に身を置いた研究者として、全国初の自治体史となった『平安通志』のスタッフ・阿形精一をとりあげた論考（小林論文）では、阿形の事績を通して歴史学草創期の担い手の存在と役割が指摘される。これは「みやこ」から「古都」への道筋をたどった京都が内包する歴史性の問題とも関係する。郷土研究家・田中緑紅をフィーチャーした論考（黒岩論文）では、土俗学に対して独自のスタンスを貫いた在野の研究者のあり様が興味深く示される。京都帝国大学をめぐるのは、法科大学と図書館・大学本部などとの不和の内実（廣庭論文）、学徒出陣の実態（西山論文）、西田直二郎の〈文化史学〉の歩みと意義（菊池論文）を扱う3論文が、アカデミズムの諸相を提示する。

「おわりに」に掲げられた付論Ⅰでは、20篇の論考を受けて、近代京都研究における市政史研究と文化史研究の相互補完関係が強調されるとともに、実態研究とイメージ研究とがバランスするところに本書の意義が指摘される。付論Ⅱにおいても、京都イメージの問題に焦点が当てられ、本書論文を踏まえたうえで、「京都イメージが、府議会、都市計画、地域振興などの現実の中でいかに相克するか

（591頁）」を深めることが、その主体性の問題を含め今後の課題として提示される。

イメージと現実の相克

「本共同研究のモチーフは、首都としての長い伝統を縦軸に、明治二年東京「奠都」以降の近代の一地方都市としての政治社会経済的現実を横軸に、古都イメージと現実との相克を、それぞれの分野から総合的に論じることにあつた。（590頁）」

近代京都を射程とする際に、イメージと現実との相克を見極めることが重要であるとの認識は、次のように指摘される京都の潜在的特性に起因する。

「近代都市・京都の、他とは違う文化史的意義は、「古都」の言葉に象徴される、前近代の「歴史」「伝統」という文化的価値を背負った都市の性格にある。（588頁）」

こうした視点は著者らに共有され、各論考では、「歴史」と「伝統」を背景に、近代以降「古都」としての自覚の上に構築されていた京都イメージの表象と、政治や経済、都市計画といった都市経営の現実との間のせめぎあいを描き出すことが目指される。そのアプローチは、表出したイメージから解き起こし、そこに歴史認識の発現の諸相と意味を析出する方法と、現実、つまり実態を詳細に把握・分析することで、結果として生成されるイメージへと辿りつく方法に分けられる。

イメージの問題を主題とする論考は、第Ⅱ部「風景」、第Ⅲ部「文化」を中心に収められるが、なかでも、シダレザクラやヤマザクラなどの伝統種と、近代種であるソメイヨシノの混植に、それぞれ「伝統」と「近代」のメタファーを読み取る高木論文、谷崎潤一郎が「昔の東京」を京都に見るとき、そこに王朝イメージの喚起があったとする藤原論文、安土桃山時代、とりわけ豊臣秀吉の顕彰と茶の湯の復興との関係を論じた桐浴論文が、京都イメージを直接的に論じている。また、ある事象の背景に、イメージの生成を見出して

いるものとして、並木論文では、明治4年の京都博覧会の「骨董会」的な性格が、翌年の第一回京都博覧会では「古美術」重視へと移行することを指摘することで、国家の歴史を担うものとしての京都イメージの萌芽を指摘する。長論文では、三宅八幡を事例として洛外村社の変容を、昭和初期の史蹟名勝を核とする洛中の京都イメージの形成と関係付けて捉える。丸山論文の史蹟名勝天然記念物保存法をめぐる動向、工藤論文の観光振興主体の推移、小林論文の歴史学を担った人材、鈴木論文の〈京都の祝祭〉誕生の構造についての考察は、京都イメージ生成の実態論として位置づけられよう。大きな枠組みからは、第I部「都市」の都市計画や地価の分析は、京都イメージ生成の舞台となった都市空間を、第IV部「政治」の宗教や都市名望家の動向は、京都イメージの政治的・経済的基盤を扱う点で、イメージの問題とつながっている。

本書を通読することでひとまず読者は、近代において京都が経験したイメージと現実の相克について、読者それぞれに見取り図を描くことが可能となる。しかし、ひとつひとつの論考をみると、課題は残されているように思われる。たとえばイメージ論では、発現したイメージ自体の解釈はなされていても、それを仕掛けた主体の存在と思惑には踏み込んでいない、あるいは看過されている。イメージ生成のメカニズムを考えると、主体の問題は避けて通れない。また、実態論では、事実関係の詳細は明らかにされても、それがどのように京都イメージに結びついていったのかについての言及がない。つまり、現実がイメージを生み出す瞬間が捉えきれていない。都市計画であれば、事業の結果として出来上がった空間に付与されたイメージに対する分析が欲しい。

ただ、ふたつの付論に示されるように、こうした各論の限界に編者は自覚的である。本書の意図が、近代京都をひとつの像として結ぶことにあるのではなく、多面的な理解に

よって相対化し、総体として浮かび上がらせることにあると考えるとき、その理解と総括は読者に委ねられている。

都市計画をめぐる論考にひきつけて、さらにこの問題を含め本書の論点を考えてみたい。

都市の主体

第I部には、1910年代後半から1930年代にかけての市区改正・都市計画に関して、都市計画道路の計画策定経緯を追った伊従論文、都市計画法による土地区画整理と道路建設のセット事業の立案・実施過程を探った中川論文の2篇の論考が収められている。これまで、近代における京都の都市改造、都市計画事業に関する研究は、東京や大阪に比して進展していないのが実情であった。特に、1919年に降に進められた都市計画法下での都市計画については、概要が知られるのみで、実態を掘り下げた既存研究は極めて少ない。視点は異なるものの、2論文はこの点において、まずもって注目すべき論考であることを確認しておきたい。また、本書の刊行に前後して、京都市政史編纂事業の成果として、伊藤之雄編著『近代京都の改造——都市経営の起源1850～1918年』（ミネルヴァ書房、2006）、「京都市政史」第一巻『市政の形成』（叙述編）（京都市政史編さん委員会、2009）が相次いで出版され、都市改造事業への市政史研究からの言及も増えている。京都の都市計画史研究は、こうした近年の成果によって新たな局面を迎えたといつてよい。

都市改造・都市計画事業を論じるにあたって、避けて通れないのが主体の問題である。伊従論文では、三大事業までは京都内部において企画立案・予算裁定・事業決定がなされていたが、1918年の市区改正の適用によって、立案・審議・決定の権限が国（内務省）に移り、京都市側は修正建議と事業年度決定を行うのみとなったことをあげ、それを「都市計画の自治喪失」と捉える。その過程を、市区改正設計における道路計画の立案から都市計画決

定に至る、内務省と京都市側との折衝経緯に求める。行政区単位ではなく、周辺地域も含めた広域で都市整備を進める必要に迫られた時代において、都市計画が国家主導へと移行した事実は、都市計画法の性格も含め、石田頼房氏によってすでに指摘されるところである。それに対し、「京都市政史」第一巻では、京都市区改正委員会や都市計画京都地方委員会における、京都市会委員が提示した修正案の可決動向などから、都市計画立案においても市会の意見が反映されていたと判断する（第Ⅱ部第二章三節（４）「『大京都』をめざして——第一次大戦後の都市改良事業——」）。

こうした見解の相違は、「自治」とは何か、ひいては「自治」の主体とは何かという問を投げかける。都市計画審議における京都市側の構成員をみると、性格を異にする主体が混在していることがわかる。大きく捉えると府知事・市長など理事者、市会選出委員、市・府の技術者である。彼らの背後には市会、そして市民が存在する。こうしてみたとき、都市計画の策定においては、国対京都といった単純な構図では捉えられない事情が複雑に絡み合っていたことは容易に想像される。例えば、池田宏など国からやってきた理事者は、どのような立場と行動をとったのか。この問題は、大阪をめぐる小島田泰直氏などが指摘してきた、「都市専門官僚」の台頭といった状況が、京都ではどのように展開したのかといった問題と重なる。また、永田兵三郎や高田景をはじめとする都道府県を渡り歩く、半ば国家官吏化した地方技術者は、都市計画をどのように捉え、どのような技術的解決を図ったのか。技術者の存在と関与については、中川論文においても永田兵三郎をめぐる主題に掲げられ、1910年代後半以降に台頭する内務省を頂点とする「都市専門官僚」の下での、地方技術者の組織化と動向の把握の必要性が示される。これは、技術者の多くを輩出するとともに、審議会や、ときに市政にもコミットしていった京都帝国大学のアカデミ

ムの問題にも繋がる。また、市会についても、政党政治や普通選挙などと関係して、さまざまな利害団体、利害関係が錯綜していた。この時期、政治的背景のもとに台頭した都市中間層の都市計画をめぐる動向は無視することはできない。つまり、都市計画における国主導か地方自治かといった問題は、個々の構成員にまで解体して考察すべき性格を有する。

こうした複層化し、絡み合った主体のあり様を解きほぐしていくことが、都市計画を含め地方自治と中央集権の問題を、京都において考える際の今後の課題となろう。そこに、身分や地域で分節化された伝統的支配構造と、国家による一元的掌握を目指す近代的支配構造との重層した関係が浮かびあがってくるはずである。

1915年の大正大礼時に観光振興主体が京都市に移り、1928年の昭和大礼が京都市観光課設立の直接的契機となったとする工藤論文や、時期は異なるが西村捨三の広域的な活動のなかに〈京都の祝祭〉を捉えた鈴木論文のまなざしは、こうした都市の主体へと向けられている。

現場としての都市空間

主体の問題の延長には、主体がつくりあげていく現実としての都市空間がある。可視化され経験される実体をもつ都市空間では、「歴史」「伝統」といった京都イメージの顕彰と、産業振興やインフラ整備を中心とする近代化とは、同時に解決されなければならない物質的問題である。それは「遊覧都市（観光都市）」か「工業都市」をめぐる問題として、これまでも議論が続けられてきた。伊従論文や中川論文においても、この問題について都市計画策定にかかわった技術者などの見解が紹介される。しかし、本書の論考からは、「遊覧都市」「工業都市」の議論を超えた論点がみえてくる。

中川論文では、外周幹線道路建設を、その両側に強制力をもつ都市計画土地区画整理を

実施することで推し進めた手法に、京都の特異性が見出される。背景として、他の六大都市などと比較して、既成市街地周辺部の都市基盤整備が遅れていた事実が指摘される。これは京都における郊外のあり様を示唆するものとして興味深い。既成市街地と郊外との関係は、京都の都市空間把握において看過できない問題である。

たとえば、都市域周縁部に耕地整理と区画整理による均質な街区を、無限定に広げていくことで、近代の都市空間を獲得した大阪の状況を見ると、京都における既成市街地と郊外との関係は大阪とは明らかに異なっていた。もちろん人口や経済的背景といった諸条件の違いが影響したことは言うまでもないが、これまで住宅地開発を中心に論じられてきた京都の郊外について、既成市街地との関係や地主の動向など土地利用・土地所有形態から再考する必要性は認められてよい。土地区画整理がわが国で唯一、都市計画事業として行われた理由は、そのあたりに潜んでいるように思われる。

関係して、京都においては洛中に対する洛外という前近代の空間把握の近代的変容を捉えることも重要であろう。長論文が、観光言説において古社寺や皇陵などを中心とする洛中の京都イメージが形成される一方で、洛外は自然や景勝といった洛中との差異によって意味づけられるようになることを指摘している点は注目される。

俯瞰的な視野からの考察とともに、個々の場所で立ち現れる都市空間をひとつひとつ丁寧に解体し、分析するアプローチも同時に求められる。伊従論文と丸山論文では、都市計画道路木屋町線と高瀬川保存の議論をめぐって、都市計画と史蹟名勝保存がせめぎあう現場がレポートされる。そこには、「開発」か「保存」かといった単純な二律背反の力関係では括れない多様な価値観と利害の対立と譲歩、融和が描き出される。こうした都市空間が動く瞬間の出来事を、さらに多くの地点で

観察することで、ひとつの論理ではなく複層した関係がつくりだす相の集積として、都市空間を把握することが可能となると考える。都市空間の本質はその多様性と重層性にある。

近代京都研究から近代古都研究へ

—— 相対化に向けて

本書は600頁におよぶ大著であるが、著者らが進めてきた「近代京都研究」の成果の一部に過ぎない。その膨大な研究蓄積と研究会を通じて共有された問題意識の上に、さらなる研究の深化をめざした動きが進められている。

「近代京都研究」班はその後、京都大学人文科学研究所「近代古都研究」班(班長:高木博志)に引き継がれた。班名が示すように、京都、奈良といった古代の「みやこ」であった「古都」と、現在では「古都」と位置づけられる歴史都市(金沢、仙台、岡山など)の二類型の都市群を対象とする共同研究である。目的として、「近代京都研究」で試みられた、「歴史」「伝統」といった「古都」表象と、政治的社会的現実とのズレと関係性の解明を、他の「古都」において展開することが掲げられる。

そこには、京都を相対化し、その特殊性と普遍性を析出したいという意図が示されている。「近代京都研究」の成果は、京都が「みやこ」から「古都」へと自覚的に変化を遂げていく過程を描くことで、特殊性を浮かび上がらせることに成功している。しかし、相対化のためには、他都市との比較研究が不可欠であるし、普遍性を導くためには都市類型的なかで京都を捉えなおす作業が求められる。こうした課題に対し、「近代古都研究」では、京都研究を地方都市研究のネットワークのなかに位置づけ、再構築することが目論まれている。

本書は、近代京都研究の進展を計測するメルクマールであることは、ゆるぎない事実である。本書の意義は、その飛躍的に高められ

近代京都研究（中嶋）

た研究水準ともに、後に続く研究において解 活発な議論が行われることを期待したい。近
明されるべき多くの課題を内包する点にある。年の近代史資料の発掘・収集・公開の進展も、
本書が提示した新たな地平において、さらに 今後の研究の深化を予期させる。